



深々と、悲しい

松本 侑壬子・ジャーナリスト

「大理石の男」「カティンの森」など話題作で知られるアンジェイ・ワイダ監督の最新作。これまでの骨太な祖国ポーランドの歴史に根づく作品から一転、映画化念願の短編小説と、同国を代表する女優の夫の死という個人的な出来事を何とか1本の映画にしようとするワイダ監督の撮影風景とで構成された意欲作である。

一と書くと、いかにも複雑なテクニクの難しい映画かと思われるかもしれない。だが、見ているうちに、まるで水草の揺らぐ深い川の水底へと我知らず引き込まれ、全身がどっぷりと水に濡れ、息も切なく寒い。菖蒲の茎の香りも漂ってきて…そんな気がしてくる。

本作は、2011年ベルリン国際映画祭アルフレード・バウアー賞＝映画芸術の新しい展望を切り開いた作品賞受賞という。確かに、現実と演出と物語が渾然一体となって、主人公マルタ（クリスティナ・ヤンダ）の悲哀と、マルタを演じる女優ヤンダ自身の切実さが見る者の胸奥深く真っ直ぐに届く。愛する者を喪う悲しさ、日常に潜む死に思いがけずに襲われる人間の儂さ、死んだ者たちへの追慕を断ち切れぬ苦しみ…死のにおいがひしひしと迫ってくる。

ホテルの一室。7ヵ月前に深刻な病で死去した夫との最後の日々を回想するヤンダのモノローグで映画は始まる。

大河のほとりにある小さな町。夕暮れ時には船着き場にしつらえた会場で町の男女がのんびりと踊ったりビールを飲んだり。マルタはこの町で医師の夫と長年連れ添ってきたが、第2次世界大戦中の反ナチス蜂起で2人の息子を亡くしたことで、夫婦仲はしっくりしていない。実は、マルタは最近、体調を崩していて検査結果では「この夏もつかどうか」の重病。だが、夫はそれを妻に言い出せないでいる。

春から夏にうつろうある夕方、船着き場でマルタは美しい20歳の青年ボグシ（パヴェウ・シャイダ）と出会う。都会の大学に通う恋人との悩みや不満の聞き役になりながら、喪った息子らと同じ年頃のボグシの輝くような若さに惹きつけられる。岸辺の叢くさむらに座り、思わずランニング姿のボグシの裸の肩に頬を寄せたり、冗談めかして後ろから抱きしめたり。はじめ反射的に身を引いていたボグシも、やがて水着姿のマルタと砂浜でじゃれ合うほどに打ち解ける。

滔々と流れる河の向こう岸に菖蒲が群生している。マルタは、夏の到来を祝う命の祝祭、聖霊降臨祭に必要なので、取って来てとボグシに頼む。二つ返事で川に飛び込み、腕一杯に抱えて戻ってくるボグシ。だが、息を弾ませて2度目に潜ったとき、若者は二度と浮かび上がらなかった。さっきあんなに熱い抱擁を交わしたばかりなのに…。この場面の撮影中に、突然マルタ役のヤンダは水着のままカメラの前から逃げ出す。あっけにとられるワイダ監督ら撮影隊を尻目に、折からの雨の中を走り去る。愛する人の死の場面で動揺を抑え切れなくなったのだ。

ホテルの一室ではヤンダの独白が続く…。観終わっても、まだ菖蒲が香るようで、深々と、悲しい。生き残った側のいのちの儂さも、また。

『菖蒲』

ポーランド映画 (87分) / アンジェイ・ワイダ監督

公開中

© Akson studio, Telewizja Polska S.A., Agencja Media Plus

